case『転』

阿傘　唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｃａｓｅ『転』

【Ｎコード】
Ｎ４５０６ＢＡ

【作者名】
阿傘　唯

【あらすじ】
ｃａｓｅ『承』にて『顔の無い人』の襲撃をなんとか切り抜けた唯と七海。
その後も様々な謎に襲われるが…。
小説『ｃａｓｅ』４部作第三弾「ｃａｓｅ『転』」、転がっるよ～♪

ｃａｓｅ『転』（前書き）

個人的には『学園七不思議新聞』の部分が一番好きです、はい。

case『転』

Ｃａｓｅ１３

あの後、僕らは家に帰り、妹達と４人で食卓を囲い、食事をした。
『今日、起こった事は彼女たちには、内緒にしておきましょ？』
七海の提案に、僕は乗り、『顔のない人』らしきモノを、見つけた事だけ、報告した。
二人は、口を揃えて、『一緒に行けば良かった』などど、言っていたが、僕としたら、本当に連れて行かなくてよかったと、安堵の溜息をする。
食事を終え、帰宅しようとする七海を呼び止め、家まで送る。
まだ、さっきの奴が、七海を襲いに来るとも限らない。
『見つけた』
あの『顔の無い男』はそう言っていた。
最初は僕に対し言ったのだと思っていたが、奴は七海にあの『無い顔』を向け、そう言っていたのだ。
僕の勘違いであればいいのだが…。
そんな事を考えながら、七海の家まで到着した。
『ふふ、寄ってく？』
七海は、そんな悪戯な事を言ったが、本気ではない事は分かっていたので、僕は苦笑いを浮かべ、遠慮した。
七海が、家に入ってからも、しばらく、僕は物陰に潜み、奴が現れるか見張っていたが、そんな気配はない。
僕は、家に帰ることにした。

「ふふ、そんな事があったのね？」
次の日の学校。昼休み。ぼくは物理化学教室に来ていた。

「もう一度、確認しますが、『あれ』は、先生の差し金ではないんですね？」
僕は、月野日先生に確認する。
「前にも言ったとおり、私はあなたに関して『見逃す』と宣言したわ。」
先生は言う。
「そうですか…。たしかに、『あれ』はそんな感じで、襲ってきたようには見えませんでしたし…。」
「そいつは、本当に、あなたじゃなくて、阿傘さんを襲ったのね？」
先生は聞く。
「ええ。『ようやく見つけた』とかなんとか、言っていたと思いますけど…。」
「ふむ…。『ようやく見つけた』ね…。」
先生は、何か、考え込んでいる。
「何か、思い当たる節でも？」
僕は聞いた。
「え？あ、ううん。でも、そいつ、確実に『人ではない』モノよね。」
「先生も、そう思いますか。」
「ええ。でも、私が前にいた『世界法律委員会』の実験場でも、そんな『顔が無い』怪物なんてものは、作り出していなかったと思うわ。」
「そうなんですか？」
「実験が失敗して、『恐ろしい顔』の怪物くらいなら、出来てたかもしれないけど。」
どちらにしても、恐ろしい組織だな、『世界法律委員会』、て所は…。
「少し、私の方でも調べてみるわ。何か分かったら教えてあげる。」
「そうしてもらえると、助かります。」
いまいち、この先生は信頼できないが、今は、少しでも七海に危害

が出ないよう、情報が欲しい。
「ふふ、何か良い事でもあった？」
ふいに、先生が聞いてくる。
「へ？特に何も無いですけど。」
「そう？あなた、なんだか活き活きしてるように、見えるけど。」
そう見えるのか…？
「ま、まだまだ若いんだから、そりゃあ、良い事の一つや二つ、あって当然よね？」
先生は、伸びをした。
「はあ…。」
「あーあ、いいなぁ、若いって。私も彼氏、作ろっかな？」
本当に、この先生は、何を考えているのか、読めない…。
「じゃあ、よろしくお願いします。」
僕は、そう言い、物理化学教室を後にした。

教室に戻った僕は、教科書を机にしまう七海と目があった。
「どこに行ってたのよ、唯。」
七海が聞いてくる。
「ああ、まあ、ちょっとその辺。」
僕は、適当に流した。
「今日は、昨日の事、レポートにまとめるから、午後は部室集合ね。」
七海はそう言い、教室から出ようとする。
「おい、七海。どこ行くんだよ。」
「どこって、購買部に決まってるでしょ？そろそろ行かないと、売り切れちゃうもの。」
「お弁当作ってきたぞ？」
「え？」
七海が驚く。

「昨日、作って来る、て約束したじゃんか。いらないのか？」
「本当に…。」
「え？」
「本当に、作ってきて、くれたんだ。」
七海が、しおらしくしている。
「ああ。３つ作るのも、４つ作るのも、ほとんど変わらないしな。」
僕は言う。
本当に、ほとんど手間は変わらない。
「ありがと…。」
「え？」
「『ありがとう』、て言ったのよ、ばか！」
きーーん…。
鼓膜が破れるかと思った！
「耳元で、急にでかい声出すな！耳が聞こえなくなったらどうする！」
「骨伝導で聞けばいいじゃない。」
「僕にはそんな最新設備は整ってません！」
「ばかね、唯。骨伝導と電気アンマは違うものよ。」
「当たり前だ！しかも電気アンマが最新設備ってなんか悲しい！」
「あら、電気アンマって、またぐとすごく気持ちがいいのに。」
「七海さん、いったい何に使ってらっしゃるの！？不潔なの！？」
「失礼ね、１日に３回は念入りに洗っているわよ。」
「そっちの『不潔』じゃないし！？」
「なによ、じゃあ今度から４回に増やすわよ。」
「だから、そっちの『不潔』じゃないと、言っておろう、七海さんや！」
「控えおろう！この『電気アンマ』が目に入らぬか！」
「もう、黄門様もびっくり！？時空をまたげば、それも現実的に！？」
「ばかやってないで、早くお弁当出しなさいよ。」

「もう、その逆突っ込み、大嫌い！」
僕は、半泣きしながら、鞄から取り出したお弁当を、七海に渡した。
もう、みんな大嫌い…！

一緒にお弁当を食べ終え、一定のお弁当の味の評価を、七海様にいただけた後、午後の授業を終え、僕らは部室棟へと向かった。
鍵を開けようと、僕はポケットから取り出す。
「あれ？鍵が開いてる…。」
僕は、ドアを開けた。
「遅かったじゃない。」
そこには、月野日先生がいた。
「あれ？先生、何か御用ですか？」
驚いた様に、七海が聞く。
「何よ。私だって、顧問なんだから、部室に来る権利くらい、あるんじゃない？」
先生は、口を尖らせ言った。
「何か、分かったんですか？」
僕は尋ねた。
「ううん、そうじゃないの。あなた達が、どんな活動をしているか、見に来ただけ。」
「『何か』、て何よ、唯？あなた、やっぱり昼休みに、何かしていたんじゃない。」
う…。七海の鋭い突っ込みが突き刺さる。
「ほらほら、唯君。七海ちゃんが、嫉妬してるわよ？」
先生は、面白そう、とばかりに突っつく。
「その話は、また今度。」
僕は、話題をそらす。
「お茶、入れますから、先生も座って下さい。」
僕は、そそくさと、給湯室に行き、お茶とお茶菓子の用意に入る。

「ちッ、逃げやがった。」
七海は、小さく、でも僕には、かろうじて聞こえるだけの声で言った。
…怖い…。
「唯君はね、七海ちゃんの事を心配してるのよ。」
「え？」
「あなたが、狙われたのは、自分のせいなんじゃないかって思っているみたい。」
「…唯が、そんなことを…。」
「『本当に巻き込まれているのは、唯君の方なのにね。』」
「！」
「私が、あなたの事、知らないとでも思った？」
「先生…。あなた、いったい…。」
「あれ？二人で何を話してるの？」
僕は言った。
なんか小さい声で、話してなかったか？
「ううん、七海ちゃんがね、あなたの事、疑ってたから、ちゃんとフォロー入れといてあげたの。」
先生は言う。
「ね？七海ちゃん？」
「え…ええ…。」
「？」
なんとなく、七海の雰囲気がおかしいような気がしたが、気のせいか？
「お茶入れたんで、とりあえず座って下さい。」
僕は、気にしない事にして、３つの湯呑みにお茶を入れた。
「あら、このお茶、おいしいじゃない。」
先生は言う。
「ええ。家にあった新茶を、缶に分けて部室に置いておいたんです。これから、毎日ここで活動するみたいですから。」

「『みたい』って、まるで強制的にやらされているみたいな、表現じゃない。」
七海が突っかかる。
いや、半分以上強制だと思うんだが…。
「ふふ、唯君も、七海ちゃんの前では、かたなしね？」
あなたの前でも、充分『かたなし』です、僕は…。
「それで？今日の活動は？」
先生が聞いてきた。
「あ、はい。ええと…、昨日あった出来事をレポートにまとめて、記事にする事…、だったよな？」
僕は、七海に聞く。
「ええ、そうよ。なるべく、詳しく、昨日起こった事を書いて、臨場感あふれる記事にするのよ。」
七海は言う。
「そして、『７９会』として、『学園七不思議新聞』を校内で発行するの。」
七海は、胸を張って言う。
「『７９会』？」
「七海が付けた、『七不思議探求同好会』の略語ですよ、先生。」
僕は、先生に言った。
「うん？…、あ、それで『７９会』ね！へえ、いいネーミングセンスね？ふふ。」
先生は笑う。
「でも、新聞の発行なんて、同好会で出来るんですか？」
僕は、先生に聞いた。
「ええ。うちの学校は、部活や同好会の、そういった積極的な活動には、基本的に後押しするような校風だしね？」
「へぇ、そうなんですか…。」
僕は、つい関心してしまった。
ずいぶんと、生徒思いの学校なんだな、ここって…。知らなかった

…。
「その『校内新聞』の『79会』第一号の記事として、学園七不思議ｆｉｌｅ１．『顔の無い人』を掲載するのよ。」
もう、題名まで考えてやがった、七海のやつ…。
「じゃあ、その記事の原稿が出来上がったら、先生の所まで持ってきてちょうだい。新聞部の顧問に頼んで、印刷してもらうから。」
先生は言った。
「え？それって、新聞部に迷惑なんじゃ…。」
僕は言う。
「大丈夫よ。この学校のクラブって、横のつながりが、かなりあるから。良い記事が書けたら、新聞部からも正式に特集ページとかのオファーとかも、来るかもよ？」
「『79会』と『新聞部』のコラボね？それも、おもしろそう！」
七海がはしゃぐ。
「なんだか、ずいぶん話が大きくなってきたな…。」
「なによ、このくらいで。あなた、この『79会』を何だと思ってたのよ？」
ただの七海のヒマつぶしの会…、とは正直には言えない…。
「じゃあ、話がまとまった所で、あと、がんばってね？」
先生は僕らにあいさつし、部室を後にした。
「…。」
「七海？」
「…え？」
「どうした？さっきからボーっとして。」
「ううん、大丈夫。何でも無い。」
さっきから、七海は、何かを考えている…。何を考えているんだろう…。
「さ、さっそく記事をまとめましょ？」
七海は、資料を全て机に並べ、記事作りを始めた。
まあ、いいか、気になるけど…。

僕は、席を立ち、給湯室へ新しいお茶を二人分入れに行った。

Ｃａｓｅ１４

『学園七不思議新聞』　　制作・編集

発行　　「学園七不思議探求同好会」

『学園七不思議ｆｉｌｅ．１　　顔の無い人』

連日、都内某所では、『顔の無い人』の目撃情報が頻繁に囁かれている。

我々、『学園七不思議探求同好会』（以後『７９会』）は、この目撃証言を元に、正義の名の元、原因究明に当たることになった。

リーダーこと、麗しの黒髪美少女「阿傘七海」を筆頭に、その一番弟子である「名無しのゴンザレス」（以後『唯』）と共に、この凶悪な、幼児趣味厨二病患者である『顔の無い人』との、壮絶なる戦闘に備え、武器として、「アーカーシャの剣」（人のうめき声付き）を用意し、防具として、「ＡＴフィールド」（浸食済み）を用意、予備アイテムとして、「仙豆（せんず）」を１０粒（ただし芽が出ている）、「グラグラの実」を種のみ（本体は手に入らなかった）を用意、最後に「一握りの優しさ」を用意し、万全なる準備のもと、とある団地妻へ向かった。

潜伏する事、約半年、ついに『顔の無い人』が疲れた顔をして、我々の前に現れる！一瞬にしてやられた唯を、麗しの黒髪美少女こと「阿傘七海」はやさしく抱きかかえ、復讐の炎を燃やした麗しの黒髪美少女こと「阿傘七海」の炎に焼かれた唯は、灰となって消えてしまう。

その光景に、恐怖を感じたのであろう。『顔の無い人』は泣きながら、その場をあとにしたとさ。

記者　　2年2組
取材協力　2年2組

阿傘七海
阿傘唯

「なに、これ？」
僕は印刷された記事に目を通し、第一声で、そう答えた。
「よく出来てるでしょ？我ながら、この文章力には目に鱗だわ。」
「使い方間違ってるし！？しかも自信満々で！？」
この子は、いったい何がしたいんだ？
「なによ、そんなに私の才能をひがんだって、唯は私を超える事なんて、一生無理よ？」
「その山を制覇するつもりは、毛頭ございません！」
もう、こいつを相手にしても、らちがあかない！
「あら、どうしたの、こんなところで。」
月野日先生が、廊下を歩いてくる。
「どうしたも、こうしたも、先生この記事、読みました？」
もう、先生に訴えかけるしかない！
「本当よね、この記事って…。」
ほら見ろ、七海！おまえの感性が、明らかに間違っているぞ！
「傑作中の、傑作よね。」
「ここにも馬鹿がッ！？」
「なんて言うんだろう、こう、普通の人には、こうは書けないっていうか…。」
「それは馬鹿だからです！」
「すごくスパイスが効いてるっていうか…。」

「それフタ壊れて中身全部かかっちゃってます！？」
「とにかく、学園長も『これはノーベル文学賞ものだ！』って、朝から興奮しっぱなしだったのよ？」
「ここっておバカの学園だったの知らなかったわはい残念！！」
もうやだ…助けて…。

結局この記事が、正式に校内新聞として増刷され、あまりの出来の良さに、新聞部からのオファーで毎週の特集記事を『７９会』で担当することになった。
…なぜに！？
「ほらな。私の才能は留まる事を知らんのだよ、明智くん。」
「うそだ…。こんなのうそだ…。」
「現実を受け止めたまえ、明智君。そして、以後、私の事を『七海様』と呼べ。」
「どさくさにまぎれて、変な事命令すんじゃねえ！」
いかん…。このままでは、ますます七海がつけ上がる…。
「あ、見て！あの人、この記事を書いた阿傘さんよ！」
「本当だ！私、サインもらわなくちゃ！」
「私も！握手してもらいたい！」
「な…なんだ？次々と人が…？」
いつの間にか、僕と七海の周りに、人だかりが出来ている。
というか七海のまわりに。
「ほら、唯。ぼさっとしていないで、私を警備しろ。」
「はい？」
「こんなに人気が出てしまったんだ。しかたないだろ。」
僕は、訳が分からず、七海のボディーガードとして、校舎を後にする。

（ＥＸ）お願いだから、あの記事に突っ込みを入れさせてくれ！
ｂｙ唯の巻

『学園七不思議新聞』　　制作・編集
発行　　「学園七不思議探求同好会」

『学園七不思議ｆｉｌｅ．１　　顔の無い人』

連日、都内某所では、『顔の無い人』の目撃情報が頻繁に囁かれている。
我々、『学園七不思議探求同好会』（以後『７９会』）は、この目撃証言を元に、
正義の名の元、≪【かってに『正義』とか付けんな！】
原因究明に当たることになった。
リーダーこと、麗しの黒髪美少女「阿傘七海」≪【自分だけ美化した表現！？】
を筆頭に、
その一番弟子である≪【『弟子』になった覚えはねえ！】
「名無しのゴンザレス」≪【『名無しのごんべえ』ね！なんかかっこいい外人みたいになってる！？】
（以後『唯』）と共に、この凶悪な、
幼児趣味厨二病患者である≪【そんな情報どこから見つけたの、七海さん！？】
『顔の無い人』との、壮絶なる戦闘に備え、武器として、
「アーカーシャの剣」（人のうめき声付き）≪【これで戦えるか！？人いっぱいくっついてて振り回すのたいへんだ、こりゃ！】
を用意し、防具として、

「ＡＴフィールド」（浸食済み）≪【せめて万全の状態にしておいて！？精神汚染はじまっちゃうから！】
を用意、予備アイテムとして、
「仙豆（せんず）」を１０粒（ただし芽が出ている）≪【せっかくそんなに用意したのに、管理が行き届いてない！？】
「グラグラの実」を種のみ（本体は手に入らなかった）≪【これ最も使えないアイテムだろ！？髭の船長の食べ残しじゃん！汚なっ！】
を用意、最後に
「一握りの優しさ」≪【ここだけちょっと良い文章入れてる！？見え見えすぎて、逆になんだか清々しいです、はい！】
を用意し、
万全なる準備のもと≪【絶対万全じゃない！僕、こんな装備死んでもやだ！】
とある団地妻へ向かった。≪【危うく見逃すとこだった！間違い探しか！】
潜伏する事、約半年≪【長っ！？明らかに学生生活との共生無理！】
ついに『顔の無い人』が疲れた顔をして≪【よくわかったな！？よっぽどオーラ出ていたんだなわかります！】
我々の前に現れる！
一瞬にしてやられた唯を≪【弱っ！？どうやられたのかさえ、描写なし！？】
麗しの黒髪美少女こと「阿傘七海」≪【しつこっ！？】
はやさしく抱きかかえ、復讐の炎を燃やした
麗しの黒髪美少女こと「阿傘七海」≪【いやほんとしつこっ！？】
の炎に焼かれた唯は、≪【とどめ刺しちゃった！？さっき一番弟子って言ってたじゃん！？】
灰となって消えてしまう。≪【衝撃の結末！？ナニコレ？ホラー？】
その光景に、恐怖を感じたのであろう。≪【誰だって怖いよ！てか僕が一番怖い！】
『顔の無い人』は泣きながら、≪【きっといいことあるよ。さあ、

涙をふいて！】
その場をあとにしたとさ。≪【ちゃんちゃん、て馬鹿！？】

記者　　2年2組
阿傘七海
取材協力　2年2組
阿傘唯

≪【なに最後に、つい『籍入れちゃいました♪』的な終わり方なの？ばかなの？死ぬの？】

「ふう、なんかすっきりした。」
僕は、七海の書いた記事を、一部新聞部から譲り受け、これでもか、とばかり、気のすむまで突っ込みを書きなぐった。
「それにしても…。突っ込みどころありすぎて、逆に良作に見えてくるくらいだ…！」
は…！いかん、いかん…。
これは、あの『魔女』の罠なのだ…。嵌まってはいけない…。
人として、生きられなくなるやもしれん…！
…。
…。
…。
「ぷっ！」
僕は噴き出してしまった。
「ぷっ、ぷくく…！くく…！はは…！あはははは！」
『人として、生きられなくなるやも』か…！
「はは…！あはははは！」
なんだか、本当にすっきりした。
「僕は、もう、『人間』だよな、七海。」

僕は、部屋の窓から、ふと独り言を言っていた。

あれ以来、七海は学校の有名人になってしまった。
『学園七不思議探求同好会』にも、入部希望者が殺到しているらしい。
しかし、七海は、ことごとく入部希望者を、断っていた。
「なあ、七海。何で入部希望者を、同好会に入れてやんないんだ？」
僕は、不思議、とばかりに聞いてみた。
「やっぱり、ばかね、唯は。」
「『やっぱり』ってなんだ、『やっぱり』って。」
「うちの学校のクラブ活動って、『部活動』でも『同好会』でも、部員が何人いようとも、『一律』で活動費が支給されるのよ。」
「へえ、そうだったんだ。」
僕は、感心した声で答えた。
「だったら、どう考えたって、部員はなるべく少ない方が、良いに決まっているじゃない。」
そういう事ね…。僕は納得した。
「私は『記者』兼『会長』として、当然この会には必要不可欠な存在だし、唯は『奇妙な事』を引き寄せる能力があるじゃない？」
「僕の存在意義はそこか！？」
「あとは、顧問は絶対に必要だから、これが最低限の人数であり、小回りも良く利くってわけ。」
「ふーん。」
「小売業だったら、こんな交叉比率、社長がウハウハよ？」
何だかよく分からないが、要するに成果を出すのに、非常に効率がいい、てことだろ…。
なんで七海って、そんな難しい言葉、知ってるんだ…？
「あれから、何か変な事とか、起こっていないか？」
『顔の無い人』と遭遇してから、そろそろ1週間。

特に、何も起こらず、平和な日々が続いている。
もしかしたら、七海の言う通り、本当に『月まで』飛ばされてしまったのかもしれないな…。
「ええ。私も、寝込みを襲われてもいいように、色々用意したのにね。」
「へえ、何を用意したんだ？」
「うん？それはもちろん…。」
七海はためてから言った。
「『アーカーシャの剣』とか『ＡＴフィールド』とか。」
「どうやって用意したの！？てか記事での話じゃなかったの！？」
「もちろん、色んなルートを探ったわ。」
「それってどんなルート！？ぜひ教えて！？」
「そうねえ、２ｃｈの掲示板とか…。」
「とうとう２ｃｈでそんなもの販売しちゃった！？もう警察から逃げられない！？」
「ｙａｈｏｏのオークションとか…。」
「いくらで入札！？生命維持装置に支障は！？」
「あとは、近所の駄菓子屋かしらね。」
「はいそれおもちゃ決定！てか僕も駄菓子屋行きてえ！」
「あ！あとはドンキホーテにもあったかしら。」
「さすがドンキ！品揃えの幅、広すぎ！」
「あとは、そうねぇ、ｐｒｉｃｅｌｅｓｓかしら。」
「当たり前だ！値段がつけられるか！てか最初からそこに落ち付こ！？」
「私と、あなたの、関係も、『ｐｒｉｃｅｌｅｓｓ』と、言えるのかしら。」
「うまいこと言っちゃった！？マスターカード作っちゃお！」
ああ、もう、慣れましたよ、七海さん…。
僕は、もうきっと、このやり取りから、一生逃れられない気がする…。

「そう言えば、今日からどうするんだ？『７９会』？」
あの記事の反響があってから、数日間は、学校からの表彰式やら、新聞部の記事の手伝い、全国の学生記者コンクールのお誘いなど、色々と忙しく、同好会は一時休止となっていた。
「もちろん、再開するわよ。」
七海は、やる気満々、といった様子。
「やっぱりね…。」
僕は、ひと際大きな溜息を吐いた…。

Ｃａｓｅ１５

その日の午後、部室に集まった僕らは、次の七不思議の情報集めをするため、図書室や、近所の図書館で借りてきた文献を、読み漁っていた。
「ふう、やっぱり、そう簡単に七不思議の記事に出来るような情報は、集まらないわね。」
七海は、溜息混じりに言う。
僕は、七海の湯呑みにお茶を入れながら言う。
「やっぱり、文献なんかは、全部『書き変わって』しまっているのか？」
１０年前の『あの事件』以降、そういった情報は全て『消失』してしまった、と、あの日七海は言っていた。
「うん…。少しは情報が残ってるんじゃないかと、期待したんだけどね…。」
七海は、淹れたてのお茶を飲みながら、しんみりと答える。
「結局、前七海がしたみたいに、現場での聞き込みくらいしか、方法が無いってことか…。」
僕も、自分の湯呑みにお茶を淹れる。
僕が、前、家から持ってきた湯呑みは台所にしまってあり、今二人が使っている湯呑みは、七海が用意した『ペア』の湯呑み。

…なんでこんなのに、勝手に変えてるんだ…？
「なんか良い情報源、ないかしらね…。」
七海が口と鼻の間に、器用に鉛筆を挟みながら言う。
「情報なら、あるわよ。」
ふいに、部室のドアが開き、月野日先生が入ってきた。
「先生？聞いてたんですか？」
この部屋には、盗聴器でも仕掛けられているんだろうか…。
先生なら、ありえる…。
「へえ、どんな情報ですか？」
七海が、先生の話しに食いつく。
「それはね…。」
先生の話をまとめると、こんな内容だった。

ある人里離れた山の中に、夏しかオープンしない、木製のペンションがある。
夏休みになると、小学生の集団や、登山家などで、このあたりは賑わい、テントを張ったり、バーベキューをしたり、野鳥の観測をしたりと、色々とアウトドアを楽しめる場所ではあるが、それ以外の時期には、まったくと言ってよいほど、人は訪れない。
ある秋の事、紅葉を見ようと、あるカップルがこのペンションを訪れた。
ペンションには、鍵がついておらず、無料で訪れた人に貸し出していたので、よくこういったカップルが、時期外れに訪れ、ラブホテル変わりに使用する、といった事がネットに広まり、お忍びで来るペアがちらほらと、いるらしかった。
「私たちも使いましょうね。」
「最後まで聞け。」
カップルは、紅葉を堪能したあと、ペンションには誰もいない事を確認し、また、あたりにも観光客がいない事を確認し、今夜はこ

こで一夜を明かす事にした。
「濡れ場ね。」
「いいから最後まで聞けって。」
電気が通っていないこのペンションでは、懐中電灯等の明かりを持参してくる事は、すでに利用者の中では常識になっており、このカップルも、大きめの懐中電灯を用意し、ペンションの天井に吊るしてある紐に、その懐中電灯をくくりつけようとした。
先にライトを照らしてからでないと、その紐の位置が特定出来づらいほど、もう日は傾いていた。
男はライトを付けようとスイッチを入れるが、ライトは点灯しない。電池切れかと思い、予備で用意しておいた電池に入れ替えても、やはりライトは点灯しなかった。
男は諦め、本当は使用を禁止されているマッチ（以前火事になり以来、このペンションでは火を使ってはいけない事になっていた）を取り出し、火を付けた。
その火の明かりで、天井に吊るしてある紐を、男は照らした。
そこには首を吊った女性がぶら下がっていた。
「まぢで！？」
「だからうるさい！」
二人は驚き、大慌てでペンションから逃げ出そうとした。
ドアを開け、表に飛び出ると、そこには先ほどの首を吊った女性がぶら下がっていた。
「うっぎゃ～～！？」
「耳痛っ！？耳元でその声は傷害罪です！」
カップルはますます混乱し、必死で山中を逃げ惑う。
しかし、いくら逃げても逃げても、あの首を吊った女性は、まるで追いかけてくるように、カップルの前に現れてくる。
もう、逃げ切れないと覚悟したカップルの前に、ふいに人影が現れた。
「真犯人ね！容赦しないわよ！」

「勝手に物語り作んな！」
そこには、同じ目的で訪れていたカップルがいた。
二人はこのカップルに助けを求め、後ろを指差すと、
そこには首吊り女性はいなかった。

「ふうん、『顔の無い人』の次は、『追いかけてくる首吊り女』か…。」
七海は頷く。
「ええ、面白い情報でしょ？」
先生は、満足そうに言う。
「でも、『首を吊っている』のに『追いかけてくる』って、いったいどういう状況なんですかね？」
僕は、先生に聞く。
「う～ん、それがね、その情報提供者も二人が錯乱しちゃってて、よく分からなかったらしいのよ。」
先生は続ける。
「そのカップルは二人とも、その後、精神病院に入院したらしいんだけど…。」
まさか…。
「二人とも、病室で『首を吊って』自殺しちゃったらしいの。」
僕は、背筋がぞくり、とした。
「その、発見した別のカップルっていうのは？」
僕はさらに質問した。
「そのカップルも、警察に二人を連れて行った後、１週間後に自宅で首吊り自殺。」
「え？」
「しかも、それぞれの自宅で、同じ時間に。」
「それって、もしかして…。」
僕は、ある可能性を考えていた。

「うん。私もそう考えて、調べてみたのよ。病院で自殺した二人の死亡推定時間。」
まさか…。
僕は、ごくり、と唾を飲み込む。
「そう、どんぴしゃ。」
先生は言う。
「病院に入院していたカップルは、それぞれ別の部屋で隔離されていたんだけど、死亡推定時間は同じ、１８時前後。」
先生は続ける。
「そして、それぞれの自宅で首を吊っていた別のカップルも、死亡推定時間は１８時前後だったわ。」
「４人のカップルが、別々の場所で、同じ時間に、首吊り自殺…。」
なんかのホラー小説に出てきそうな、内容だな…。
「…。」
「七海？」
「へ？」
「どうした、黙って。怖かったのか、今の話。」
僕は、七海に声をかけた。
どうしたんだ…？
「ううん、そうじゃないの。」
七海は言う。
「うん、そうね…。」
「なに？」
「唯。行ってみましょう、そのペンション。」
「え？」
「だから、行くのよ。そのペンションに『取材』にね。」
まじか…。
「あなた達なら、そういうと思ったわ。」
先生は言った。
『あなた達』って、僕は行くとは…。

「はい、これがそのペンション周辺の地図。」
先生は、七海に渡す。
用意が良すぎないか…。
「それと、まず、そのペンションの近くにある『県立日立中病院』（けんりつひたちなかびょういん）、て所に寄ってみるといいわ。」
先生は言う。
「そこに、私の親友が勤めているわ。『情報提供者』のね？」
先生はウインクしながら言った。
「その病院って、もしかして…。」
僕は言う。
「ええ、『最初のカップル』が自殺した病院ね。ここ、赤い丸がついてるとこ。」
先生は七海に渡した地図を指差す。
「ペンションとそんなに離れていないから、ついでに話を聞くぐらいは、いいんじゃないかしら。私の方から、連絡入れておくから。」
なんだか、用意が良すぎる…。
「それと、今現場は立ち入り禁止になってるから、学校側から市に、『調査申請書』も出さないとね。」
「『調査申請書』？」
何それ…？
「立ち入り禁止の区域を合法的に調査するための、『特別学区』としての権利、ですよね？」
七海？
なんでそんな事を知っているんだ？ていうか『特別学区』って…？
「あら、さすが七海ちゃん、よく知っていたわね？ふふ。」
先生は笑いながら言う。
「そう、この学校は『政府』から特別に指定されている『特別学区』なのよ。その権利行使の一つとして、立ち入り禁止区域の調査を目的とした『調査申請書』があるの。」
先生は言う。

「ま、こんな『申請書』なんて、形だけのもので、すんなり申請は通るわよ。お偉いさんは、こういう『肩書き』が好きだからね？」
先生は少し嫌み混じりに言った。
「そんなに、うちの学校って、すごい学校だったんだ…。」
僕は、素直に関心した。
…ん？…なんか引っかかる…。
『特別学区』？…『政府』？…『法律』…。
…『世界法律委員会』！！
僕は目を見開いた。
ここで繋がっていたのか…！月野日先生は…！
…？あれ…でも確か…。
「先生、ちょっと…。」
僕は七海から離れ、先生を呼び、小さな声で話しかけた。
「どうしたの？」
「先生は、『世界法律委員会』を裏切って、今は『あちら側』の幹部なんですよね？」
僕は聞いてみた。
「ええ。それがどうかした？」
先生はきょとん、としている。
「だったら、どうして『政府』が管理している『特別学区』なんかで、先生なんてやっているんですか！『世界法律委員会』に見付かってもいいんですか？」
僕は囁き声ながらも、大きな声で先生に言った。
「あ、それは大丈夫よ。『世界法律委員会』には『あちら側の潜入捜査』、てことにしてあるから、『敵の情報を得るには、まずは敵陣に』、とかなんとか言っちゃって。」
なんて先生だ…。
『あちら側』だけではなく、『世界法律委員会』まで手玉に取っているなんて…。
恐ろしすぎる…。

「実は、今回の調査も、『世界法律委員会』からの任務の一つなのよ。」
「！」
「ほら、前回の『顔の無い人』でも言ったでしょ？『世界法律委員会』の実験場で作られた『怪物』では無い可能性が高い、て話。」
僕は頷く。たしかに、そう言っていた。
「で、今回の件も、あちらさんとは関係がないらしいのよ。」
なるほど…。それで…。
「でも、この事件、明らかに『人ではない』モノの仕業じゃない？」
僕もそう思う。
「あちらさんとしても、こう立て続けに『未知なる人ならざるもの』が出現されてしまうと、色々と困る事があるのよ。特に『人体実験』関係者にしてみたらね。」
『人体実験』の関係者…。
「だからこれ、あなた達に、解決してもらおうと思って。」
「！？」
なんて事言うんだ！この先生は！？
「あなた達なら出来るわよ、『あなたたちなら』ね。ふふ。」
先生はまた笑いながら言う。
なんだ…？あの含んだような言い方…。
「期待してるわよ。『具現化使い』の唯君？」
「！」
先生は、急に僕のほっぺたにキスをした。
「な…！何するんですか！」
僕は、顔が真っ赤になって叫ぶ。
「何って、あいさつだけど。」
「ここは、日の丸の国です！」
僕は焦って突っ込んだ。
「ゆーいーくーんー！」
七海がゾンビみたいな顔をして、いや貞子か？僕に迫ってくる！

「いや！これは、その！てか、なんでそんなに怖い顔を！？」
多分、『首吊り女』より怖い顔だぞ、この顔は！？
「ふふ、修羅場ね。」
「はいあんたが発起人！」
僕は唾が飛ぶのも気にせず叫んだ。
「唯、あんた『ボッキ妊』だなんて…！どこまで破廉恥なの！？」
「破廉恥なのはお前だ！なに『ボッキして妊娠させた！？』みたいな漢字になってんだ！」
流行語大賞モノだ、この馬鹿！
「よかった。私、まだ、ギリギリ適齢期なのよ。」
「先生は黙って！？てかそんな情報漏らさないで！？」
「『お漏らしプレイ』だなんて…！もう、私、許さないんだから！」
「そんなプレイ望まれても絶対にしませんさせませんせん持ち込ませません！」
なんかの三原則みたいになっちゃった！？
「やだ、唯君。そういうのが好きなら、早く言ってくれればよかったのに。」
「一言も言ってねっ！？てか言ってたらどうにかなってたんですか少し興味あります！て馬鹿！」
「勘違いしないでよね！？別に、私、あなたの為に…。」
「もう、よか！これくれえで、許してけんろ！？」
急にツンデレキャラに変わった先生に、田舎キャラで突っ込んだ僕。
もう、どうでもいい…。
「ふふ。七海ちゃん、唯君、降参したみたいよ？」
「そうですか、なら目的達成ですね。」
なんのこっちゃ…。
僕は、その場に崩れ去った…。

（ＥＸ）ある日の二人のやり取り　ｐａｒｔ．１

「ねえ、唯。私と無理心中しましょ？」
「いきなりクライマックス！？てか『無理』って付けてる時点である意味自覚してる！？」
「私ね…。」
「スルーして勝手に話し始めた！？」
「できちゃったの。」
「いやー！？僕らそんな関係にまで急接近！？親御さんすいません！」
「ニキビが。」
「ズコー！話しちっちゃ！？てかそんなんで無理心中しちゃ駄目、絶対！」
「ビキニが。」
「七海さん服飾の才能あったのねよかったね最新作？、て死ね！」
「ニヒルが。」
「新しい一面が見れて僕嬉しいよこんちくしょう！」
「次は、アヒルかしら。」
「なんの連想ゲームなの！？心中話どっか行っちゃった！？」
「やっぱり今は、アムロよね。」
「どちらの意味にしてもだいぶ古いよ七海さん！？」
「じゃあ、コムロ。」
「『じゃあ』って何！？そんなんで名前出されたその人、謝罪しても許せませんよ！？」
「あ、これからアコム行って来なきゃ。」
「お金なら貸してあげるから、未成年が行かないで寂しいよお母さん！？」
「やっぱり無理心中しかないわね。」
「そこ！？ずいぶん遠回りして理由が判明したよこれで一安心、て借金地獄か！？」
「うん。８億ほど負債がね。」

「多っ！！一生働いても無理はい終了さようならさようならさようならっ！！」
「『ウォン』だけどね。」
「ずいぶん安くなっちゃった！？でも円に換算出来るほどの知識なし学なし！」
「それでも私はあなたの事、愛しているわ。」
「はい！ハッピーエンドナニコレ！？」
…本当に…ナニコレ…。

『ある日の唯と七海の会話』

fin.

Case16

そのペンションはここからはかなり遠い所にあった。
新幹線で向かっても3時間は掛かるだろう。僕らは連休を利用して、泊りがけで行く事を計画した。
七海も僕も、親とは暮らしていない（僕は親そのものがいないけど）ので、泊りがけの外出には、反対する者は誰もいなかた。
『あなたとお泊りなんてね。下着は何はいていこうかしら。』
何か勘違いしている七海をよそに、その日が来るのを僕らは平穏に過ごした。
週末、昨日の土砂降りが嘘のように、空はすっきりとした、雲一つない晴れとなった。
「晴れてよかったわ。私、雨って嫌いなのよ。」
七海は言う。
「髪はクシャクシャになるし、制服は濡れるし、なんで神様は雨なんて降らせるのかしら。」
それは、水が無ければ、生物は生きていけないからだ、と心の中で

突っ込む。
「でも、ペンションって山ん中なんだろ？地盤が緩んでたら、危ないよな。」
僕は、昨日の土砂降りを思い出す。
「大丈夫よ。昨日の数時間だけでしょ？雨降ったのって。」
七海は言う。
「もしも、土砂崩れとか起きても、それはそれで面白いじゃない。」
「面白いか！死んでまうわ！」
つい、関西弁で、突っ込んでしまった…。
「あ、唯。来たわよ。」
ホームで待っていた僕らの前に、新幹線が大きな音を立てて停車する。
「私、新幹線って白亜紀以来だわ。」
「長生き！？てかその時代に新幹線あったら、恐竜さんも案外まんざらじゃない気分！？」
いつもの、くだらない会話をしながら、僕らは新幹線に乗車する。
「あら、意外に空いてるじゃない。」
七海は車内を見まわしながら言う。
「本当だ。昨日の雨の影響かな？」
昨日は短時間でも、そうとう降ったはずだ。
誰もが、今日、こんなに晴れるとは思わなかったに違いない。
僕らは、指定席の切符のナンバーを頼りに席を探す。
「あ、あったよ、七海。」
席を発見した僕は、七海に声を掛け、席に座る。
「私、窓側じゃなきゃ嫌。」
「子供か！？」
七海と席を交換する。
…僕だって窓側が良いのに…。
「ここから、３時間か…。」
僕は腕時計を見ながら、３時間後にタイマーをセットした。

「唯、何やってるの？」
七海が聞く。
「ん？ああ、もし、車内で寝ちゃった時の為にアラームを仕掛けておいたんだ。」
「え！？膣内で出しちゃったときの為に爆弾を仕掛けておいたの？なんてダイタン！」
「一文字も合ってねぇ！？どんな変態的猟奇的おバカさんなの、僕って！？怖っ！？」
「へえ、自覚あるんだ。」
「認めちゃいねえし！？僕はもっと相手を大事にする人よ七海さん！？」
「永遠の愛を誓いますか？」
「誓えるほどの良いムードこれっぽっちもねえ！？神父さんも口あんぐり！？」
「舐めるときも素股をするときも…。」
「『やめるときも、すこやかなるときも』だ！そんな行為で愛を誓うのいやっ！」
「何よ、唯。先っぽの汁を出すなんて、ずるいわ。」
「『先回りするなんて、ずるいわ。』にして！？いや、絶対そうして！？」
「しょうがないわね。そんなにして欲しいなら、してあげるわ。」
「うん。まだなんか色々引っかかるけど。とりあえずその条件を飲む。」
「そんな、汚いわ。そんなの、飲むなんて、私、恥ずかしい…。」
「僕が一番恥ずかしい！うん間違いなく僕がいっちゃん恥ずかしい！もう勘弁して！？」
「恥ずかしいのは、私も一緒…。唯だけじゃ、ないよ…。」
「まったく、きゅん、とも、すんとも言わない僕はおかしいでしょうか、神様！？」
「七海様でしょ？馬鹿ね、唯は。」

さらば…僕の青春…。
このやり取りから、解放される日は来るの…？お母さん…？（いないけど）

３時間後、この間もずっと七海との会話が続き（精神汚染レベル３に達した）、目的地に着いた僕らは、お昼を食べるため、近くの喫茶店に入った。
「へえ、こんな辺境の地でも、おしゃれな喫茶店なんて、あるのね？」
七海は驚いたように言う。
『辺境の地』は言い過ぎだろ…。
「ここは、新幹線も停まるし、この辺では、ある程度栄えてる方なんじゃないのか？」
僕は言う。
「私は、こんな田舎、ごめんだわ。」
七海はメニューを見ながら言う。
この前、静かなとこ好きって言ってなかったか、こいつ…。
僕らは二人とも日替わり定食とドリンクを頼み、一休みする。
「ここからだと、『県立日立中病院』の方が近いよな。」
僕は言う。
「ええ。先にそっちに寄るつもりだったし、丁度良いわ。」
七海は言った。
程なくして、料理が運ばれ、僕らはおしゃべりをしながら食事をした。

「意外においしかったわね、あそこ。」
目的地に向かいながら、七海は言った。
「ああ、味付けがうまいよな…。今度あんな感じで作ってみようか

な…。」
僕は、さっき食べた料理の味付けを思い出しながら言った。
「あんた、そういえば、料理に関しては、うるさいんだったわね。」
七海は言う。
「ん？ああ…、まぁ、そんなことも無いけど、美樹が味にうるさいから、リクエストに応えてたら、いつの間にか色々作れるようになった、て感じかな。」
僕は言う。
美樹の一番のお気に入り料理は、なぜか『キムチ炒飯』だ。
美樹曰く、『色々作れても、最終的には、全ての料理は炒飯に行き着くのよね』だそうだ。
僕には、未だに、その言葉の意味は、理解出来ていない…。なぜ『炒飯』…？
「相変わらずの『シスコン』よね、あなたって。」
七海がなじる。
「違うわ！」
僕は突っ込む。

喫茶店から2キロほど山道へ歩いた所に、ひと際大きな空間が開けた。
「ここが、『県立日立中病院』か。」
僕は、その病院を見上げながら言った。
「入口まで、まだ坂があるわね…。どんだけ山ん中なのよ、ここって…。」
七海は、文句を言いながらも、入口へ向かう。

この『県立日立中病院』は歴史も古く、この辺一帯の病院では、一番の大きさを誇っている病院らしい。
中でも『精神科』『心療内科』『神経外科』は、国内でも有数の医

師の集団が開いている、という事もあり、遠くから来る患者もかなりいるらしい（僕はこの３つの科がどう違うのか全く分からないが…）。
月野日先生は、一時期アルコール中毒に罹り、治療の為、この病院に通っている内に、あの『情報提供者』と知り合ったらしい（アル中って…）。
その後、意気投合し、治療が終了した後も、頻繁に連絡をとりあってるとか。
『そこに、私の親友が勤めているわ。』
『親友』か…。
僕には、いるのか？そんな風に、思える友達が…。
「唯？置いていくわよ？」
七海が後ろを振り向きながら言う。
「まさか、私のパンツ見るために、わざと遅れて歩いてるんじゃないでしょうね？」
「はいはい。ズボン姿の七海さんのパンツを、どうやったら見えるのかは、聞かない事にします。」
「脱がす気！？」
「脱がすかっ！」
自意識過剰にも程があるだろ…！

入口に着いた僕らは、受付に行き、『情報提供者』の名前をコールしてもらう。
『情報提供者』、そして『月野日先生の親友』こと『御神ゆかり』（みかみゆかり）は、この病院で勤務して、もう１０年になるらしい。
先生と知り合った頃は、まだまだ務めたばかりの新人で、危なっかしくて見ていられなかったとか。そんな事を、先生は、嬉しそうに話していた。
あの先生も、そういう姿しか見なければ、普通の良い先生にみえる

んだけどな…。
僕は、心の中で、そんな事を考えていた。
と、向こうから、ナース姿の看護師が、僕らに近づいてくる。
「こんにちは。あなた達が、彩音の言っていた学生さん？」
そのナース姿の看護師は言う。
「はじめまして。私は、『御神ゆかり』（みかみゆかり）。『ゆかりん』、て呼んでね。」
「へ？」
僕は、いきなりの事で、素っ頓狂な声を出した。
「じゃあ、ゆかりん。月野日先生から、話は聞いてるわね？」
「馴染むの早っ！？お前も今日、初対面だろ！？しかも『聞いてるわね』て！？」
こいつの度胸はどこから湧いてくるんだよ…。
僕は、ちょっと緊張してたのに…！
「こっちよ、七っちゃん、ゆっちゃん。」
「早くも新密度ＭＡＸ！？もう少し攻略がいが無いと、ユーザーに飽きられる！？」
「何訳の分からない事、叫んでるのよ。ミジンコ。」
「すいませんごめんなさい謝りますから『ミジンコ』はやめて！？」
僕は泣きそうになりながら、七海に訴えた。
「あら、『ミジンコ』だって。ゆっちゃんのイメージにピッタリでかわいいわ？」
「そんなキラキラとした笑顔でドギツイ事をさらりと言わないで下さい！」
御神さんは、悪げのないそぶりで話す。
く…こいつは、かの『天然キャラ』ってやつなのか…。
恐るべし、天然ナース…！
僕らは、御神さん（以後御神さんから『ゆかりん、て呼んでくれなきゃや～だ！』と強制され、『ゆかりん』と記す）に連れられ、病棟を進む。

「御神…じゃなかった、ゆ…ゆかりん？」
「ん？なあに、ゆっちゃん。」
は…恥ずかしい…！すっごい恥ずかしい…！
「あら、ゆっちゃん、顔赤くなっちゃって。やん、かわいい♪」
ゆかりんは僕をなじる。
「変態ムッツリシコシコ童貞の事なんて、相手にしなくて良いわよ、ゆかりん。」
「究極最上級の悪口がさらっと出てくる七海さんの馬鹿死ね！」
僕は子供みたいに七海に叫んだ。
「私が死んだら、あなたの墓場で化けて出てやるわ。」
「もっと早い段階で化けて出てきて！？僕死んだ後、急に出てこられても、あまりに時間が開きすぎて、逆におっかねえ！？え？誰だったっけ？てなっちゃう！」
「私はね～、あの世ってあると思うのかな？」
「知るか！てか疑問形！？自分の意思を強く持って！？ゆかりん！？」
そうじゃない…！そうじゃなくて…。
落ち着け…。ペースを持っていかれるな、僕…。
「ゆかりん、今、僕らはどこに向かってるんですか？」
「敬語じゃ教えない～。」
く…。落ち着け、僕…！
「僕らは、どこに向かってるの？ゆかりん？」
よし…！言えた…！
「あれ？どこだったっけ～？」
「僕の努力返して！？」
「あ、そうそう、『例の病室』よ。危うく忘れちゃうとこだった～。てへ♪」
『てへ♪』じゃねえよ、『てへ♪』じゃ！この人めんどくさっ！
「あのカップルが自殺した病室よ。」

七海が代わりに言った。
「ああ、そこね。」
僕は、納得した。
「あの日ね～、錯乱したカップルが運ばれてきて、それぞれの部屋に移したんだけど…。」
ゆかりんは続ける。
「あまりにも暴れるから、先生の指示で鎮静剤を打って、寝かしたのよ。」
そんなに錯乱していたのか…。
「でね～、次の日の夕方、うちの若い看護師が夕食を持って、病室に入ったら…。」
僕は、ゴクっと唾を飲み込んだ。
「あれ～？今なんの話してたんだっけ？」
「僕の緊張返して！利子つきで！」
「ああ、そうそう、思い出した～。『首を吊っていた』んだった～。」
「そこ最も忘れちゃいけない場面だし、忘れようと思って忘れられない人もいるよ！？」
こいつは…かなりの猛者だぞ…。ある意味最強キャラかも…。
「で、別の病室にいたもう一人も、同じ時間に『首を吊っていた』のよ。」
七海が代わりに続きを話した。
こいつ、意外にこういう人のフォローに向いてるのかも…。
「これから、その病室に…。」
「どうした？」
七海が立ち止った。
「…。」
ん？どうしたんだ、七海の奴…。
最初この話を先生から聞いた時も、なんだか様子がおかしかったような…。

「あ～、着いたわよ。ここが1件目の現場。」
ゆかりんは部屋の鍵を開ける。
「あれ？今は、この部屋、使われていないの？」
僕はため口で聞いた。
「あ～、年上にはちゃんと敬語を使わないと駄目なんだぞ～？」
「どっち！？いったいどっちがお望み！？」
もう、いいかげんにしてください…！
もう僕ぷんぷんなんだからねっ！？
「この部屋は、あの事件後、閉鎖してるのよ～。」
ゆかりんは言う。（もう『ゆかり』でいいや、めんどくせっ！）
「だから、中は『あの日』のまま、保存されているわ～。」
ゆかりは僕を中に招いた。
「うわ…、ずいぶん真っ白な部屋ですね…。」
僕は言う。言葉使いも、もう好きにさせてもらうもん！
「錯乱状態の患者が入院するときは、だいたいこんな感じの部屋かな～？」
ゆかりは言った。
「これって、拘束具ですか？」
僕は、ベットに備え付けてあるものを指差し、聞いてみた。
「そう。暴れて、舌を噛み切らないように、そういったものを使う場合もあるのよ～。」
「へぇ…。」
初めて見るな、拘束具って…。
「ゆかりさんは…」
「私は、そんなの使ってプレイした事なんて、ないわ！信じて！お願い！一回だけしか！」
「聞いてなっ！？てか最後自分で白状しちゃった！聞きたくなかった僕ちゃん！？」
これを使ってのプレイ…。看護婦と…。
いかんいかん…！僕よ、戻ってこーい！

「いやだわ、私としたことが…。いっけね♪」
「ぺこちゃん顔しておどけても、もう遅いです！はい！」
まあ、もう良いだろ、この部屋は…。
僕は、部屋を出ようとする。
「あれ？七海？」
そう言えば、七海がずいぶん前からいないよな…。
「七海？」
廊下に出てみるが、七海の姿はない。
「あれ～、七っちゃん、どこ行ったのかね～？」
ゆかりが言う。
何だろう、何となく嫌な予感がする。
「ゆかりさん、もう一つの病室に連れて行ってください。」
「ん～？でも七っちゃんは？」
何だろう、僕は焦っている。
「いいから、連れて行ってください！」
僕は、ゆかりを急かし、もう一つの病室に向かう。
なんだろう…。心臓がドクドク言っている。脈もだいぶ早い。
「もう一つの部屋は3階にあるのよ～。」
く…。この広い病院で、3階って言ったら、かなり距離があるじゃんか…！
「あ、エレベーター！」
僕は、エレベーターを見つけ、ゆかりと共に乗る。
「あ～れ～？」
ゆかりは首をかしげている。
「どうしたんですか？」
僕は焦っている。
「なんだか～、動かないよ？このボタン？」
故障！？こんな時に？
「くそ！」
僕は、ゆかりの手を引き、階段へ向かう。

「ちょ、痛いよ～。」
ゆかりが何か言っているが、僕は無視し、急いで階段を上る。
何だろう、この嫌な予感…。
そうだ…。あのときの『顔の無い人』に会った時と同じ感じ…。
こう。皮膚がピリピリするような、そんな緊張感…。
「七海…！」
ようやく、長い長い階段を3階まで登る。
「どっちですか！」
僕は、ゆかりに聞く。
もう、ほとんど叫び声になっている。
そんな、僕の只ならぬ気配を感じ取ったのか、ゆかりも顔色を変え、すぐに指差す。
「あっち！あそこの奥から2番目の部屋！」
聞き終わる前に、僕はゆかりを置いて、走り出していた。
「ちょ、ゆっちゃん！鍵は？」
ゆかりが何か言っているが、僕にはもう、聞こえない。
何だろう、何だろう、この嫌な感じ…！
何か、大切なものが、とても大事な物が、こう、手の、指の、隙間から、こぼれ落ちてしまうような、そんな感じ…。
いやだ…。
僕は、この感じが、とってもいやだ…。
なんで？何でそんなにいやなんだろう…。
今まで、そんな事を感じる事は、無かった…。
ずっと、いつからか、気付いたら、一人で、生きていた…。
その時は、そんなこと、感じた事も、なかった…。
でも、美樹と出会って、真夜と出会って、僕は、だんだんと、変わっていった…。
そして、七海と出会って…！
僕は、目的の部屋の前に到着した。
息は切れ切れで、肩で息をしている。

額には、汗をびっしょりとかいている。
喉もカラカラだ。
僕は、目の前のドアを開けようとしたが、鍵が無い事に気がついた。
『ちょ、ゆっちゃん！鍵は？』
さっきゆかりが言っていた言葉を、今思い出した。
そうか、鍵が…。
しかし、そのドアに、鍵は掛かっていなかった。
いやな予感がする。
嫌な予感がする。
いやなよかんがする。
僕は、そのドアを、開けた。
その、
部屋の、
中には、
首を吊っている、七海の姿が、ぽつんと、あった。

Ｃａｓｅ１７

「……ん……。」
「七海！！」
「あれ……唯…。私…、あれ、…ここ、どこ…？」
病院の一角。
ベットの上で、気を失っていた七海は目を覚ました。
「七海…！ああ、七海…！」
「なによ、…なに、泣いてるのよ、唯…。へんな、顔…。」
七海は言う。
僕は、七海の手を握りしめていた。
そう、ここに七海が運ばれてから2時間ずっと。
「唯、手がべとべとしてる…。やだ、そんな手で、握ってたの…？」
僕は、ずっと泣いている。

「あ！七っちゃん！先生、七っちゃんが気付きました！」
ゆかりが、病室の入り口から、廊下にいるのであろう先生に、大きく声をかけた。
「よかった～。ゆっちゃんが、あの部屋に飛んでいったから、大事に至らなかったんだよ？」
ゆかりが声を掛けながら病室へ入って来る。
「唯が…？」
七海はきょとん、とした感じで言った。

あのあと、七海の首吊りを発見した僕は、急いで七海を降ろし、すぐに追いついてきたゆかりに、事情を説明し、この病室へ運んだ。
七海は意識が無かったが、医者が言うには、逆にそのおかげで助かったのだという。
『意識がない状態で、首を吊られていたんだ。もし、意識があったら、首を吊られている時に、苦しんで暴れて、余計首が締まってしまうし、衝撃で頸椎が外れて、一瞬であの世に行ってしまったかもしれなかったよ。』
その言葉に、僕はぞっとした。
『でも、不思議な事に、まったく意識は戻らなかったみたいだし、君がすぐに駆けつけてくれたおかげで、大事には至らなかったよ。時期、目が覚めるよ。』
それでも、僕は安心しきれず、こうやって、ずっと七海の手を、握っていたのだった。

「唯、目が真っ赤。」
七海が僕の目を見て言う。
「当たり前だ、泣いてたんだから。」
僕は、恥ずかしげもせず言う。
「ありがと。唯が助けてくれたんだね。」
七海は言う。

「たまたま、運が良かったんだ。七海が気を失ってたから。」
一歩間違えれば、七海は死んでいた。
「ねえ、唯…。」
「どうした？」
「お願い、聞いてくれる？」
「どうした、何でも言ってみろ。」
「『キス』、してくれない？」
七海は、ずっと僕の目を見たままだ。
「駄目？」
七海はやさしい目をしている。
僕は、その七海の目の下にまず、短くキスをし、
次に唇にキスをした…。

七海が目を覚ましたという事で、待機していた警察の事情聴取が始まった。
七海が言うには、あの時、僕とゆかりが部屋に入った後、後ろから急に人影が迫り、次の瞬間には気を失ってたのだという。
警察は『睡眠薬』か何かを使って、七海を気絶させたのだと断定し、病院内をくまなく探したが、犯人らしい人物は、見付からなかった。
病院内の犯行、睡眠薬の使用の可能性から、病院職員が第一容疑者として疑われたが、その時間はどの職員もアリバイがあり、入院患者も、自分で動ける患者は、全員アリバイがあったことがわかった。
警察は、外部の犯行と断定、近辺の調査に出て行った。
その頃には、あたりはすっかり暗くなり、今夜は二人とも、病院に泊まらせてもらう事になった。
僕は、予約していたホテルにキャンセルの電話を入れ、月野日先生にも連絡した。
「大丈夫だったの？さっきゆかりから連絡があって…。」
月野日先生は、電話の向こうで話す。

「ええ、大事には至らなかったので、大丈夫だと思います。」
僕は言った。
「ごめんなさいね。先生も、いきなりこんな事になるだなんて、思わなかったから…。」
先生は、すまなそうに言った。
「いえ、初めから危険なことは分かってたのに、僕が油断していたから…。先生は悪くありません。」
僕は、本心でそう言った。
そう、ここに来る事が危険な事くらいは、最初から分かっていた。
『顔の無い人』の時にも、七海はかなり危険な目にあったから、今回も用心して、この調査を受け持ったはずだった。
本当は、七海を連れてくるべきではない、と思っていたが、七海が『行く』と宣言した時点で、僕は『逆らう』事が出来ない。
そう、七海は『命名者』だ。
だからこそ、僕は、どんな事があっても、七海を守らないといけないのに、『二度にわたって』七海を危険な目にあわせた。
七海は普通の人間だ。
僕が、守らなきゃ、すぐに死んでしまうかもしれない、か弱い存在だ。
僕にはこの『具現化能力』がある。
使いづらい能力とはいえ、『生身の人間』よりは、遥かに高い能力のはずだ。
『ならば、僕が、守れないでどうする…！』
僕は、心の中で、自分を、戒めた。
もう、二度と、七海を、危ない目には、会わせない！
そう、心の中で、僕は、誓った…。

「先生に連絡？」
ベットから起き出した七海は、病室に戻ってきた僕に声をかけた。
「もう、いいのか？起きだして。」

「うん、平気。まだちょっと、首が痛いけど。」
七海は、包帯でぐるぐる巻きの、首をさすった。
「でも、『首吊り』って、こんなに首の皮膚が削れちゃうものなのね。貴重な体験しちゃった。」
七海はおどけて言う。
「冗談はよしてくれ。その傷も、2、3日で良くなるってさ。」
「そうよね。ふふ、ごめんなさい。」
「？」
「あなた、何だか、『お姫様を守るナイト』みたいな顔、してるわよ？」
いつもの七海に戻ったようだ。
「ああ、僕はもう、七海を危険な目になんか、二度と会わせない。」
僕は言った。
「ど…、どうしたのよ、急に…。らしくもないこと言って…。」
なんだか七海の顔が赤い。
「いいんだ。僕が、そう、決めたんだから。」
僕は、はっきりと、七海の目を見て、そう言った。
「そ…そう…。ならいいわ…。お…、お願い…します…。」
なぜか、七海はしおらしい。
「さあ、もうちょっと休め。今日は、僕がずっといるから。」
「うん…。」
七海は、顔を伏せ、僕の言うとおり、ベットに横になった。
「…ねえ、唯…？」
ポットのお湯を急須に入れている僕に、七海は声を掛けた。
「私ね…。」
「どうしたの？」
「私…、本当は…。」
七海は何かを言いたそうにしている。
「私が…。」
「ん？『私が』…？」

「『私が』『あなたを…』」
「え？」七海は、何を言うつもりなんだろう…。
「『ぐ…』」
ぐ？
「ぐうの音も出ないほど好きなの！？」
「はい！？」
七海は、ぷいっと反対側を向いて、毛布をかぶってしまった…。
なんだ？いったい…。

その後、七海は何も言わないまま、毛布をかぶったまま、寝てしまった。
さっき、七海は、僕に、何を言おうとしたんだろう…。
『私が、あなたを…』
七海が、僕を？
『ぐ…』
ぐ？
何だ？ただ、言葉に詰まっただけか…？
それとも、なんかの言葉を言おうとしてたのか…？
分からない…。ぐ…？
グランドスラム？グーグル？グルメ？ぐっさんではないよな…。
グミ、グローバル、グルーポン…。
ええい、わかんねえ！
僕は、想像するのを諦め、来客用の毛布を羽おり、ベットの下へ腰かけた。
まあ、なんでもいいか…。
僕が、七海を『守る』事には、違わないから…。
僕は、少し冷めたお茶をすすりながら、そんな事を、考えていた…。

（ＥＸ）ある日の二人のやり取り　ｐａｒｔ．２

「ねえ、唯。このスカート、似合うかしら？」
「え？ああ、いいんじゃない？」
「何その、気持ちの、こもっていない言い方。」
「じゃあ、なんて言えばいいんだよ。」
「『七海さんの、お尻って、まんまるでキュートだね。』」
「言えるか！スカートどこ行った！？」
「あなたが、今、破り捨てたじゃない。」
「だからお尻が丸見えに！？て馬鹿っ！？」

「ねえ、唯。私、ショートにしようかしら。」
「え？ああ、似合うかもな？」
「モンブランも捨てがたいわね。」
「ケーキかっ！？今僕らケーキ屋かっ！？」
「でも、ミディアムも捨てがたいわね。」
「ん？あ、やっぱり髪型か…。そうだな…。」
「まあ、猛禽類としたらレアよね。」
「焼き加減じゃん！？しかも猛禽類て！せめて肉食系女子までランクダウンさせて！？」
「でも、まあ、今のままロングでも、私には合ってるわよね。」
「くそう、どっちだ～どっちだ～、どう出る、七海さん！」
「でもやっぱ、パー４にしとこ。」
「ホラキタ！？てか七海さんゴルフやってたんだ知らなかった！と！」
「何言ってるの、唯。このゲームのどこがゴルフゲームだっていうの？」
「ペルソナ４出てきた！？『Ｐ４』ね！『パー４』だと何だかお年寄りの言い方に！？」

「ねえ、唯。あなた、死んでくれる？」
「出だしから意味分かんねえ！？それで死ぬ奴いたら、ただの馬鹿！？」
「あら、間違えたわ。『ねえ、唯。あなた、死になさい。』」
「より強制力アップ！？『命名者』の権限につき、はい僕死んだ～！？」
「冗談よ、おませさん。」
「ませてねえ！？冗談でもお前の命令で、僕は死ぬる！？」
「都合の悪い事ばかり、私に押し付けないでちょうだい。」
「今あなた、私に『死ね』と押し付けたでしょうが！この鬼畜！やまんば！」
「今最後に何か言った…？」
「いえ…。何も…。」

『ある日の唯と七海の会話』

fin.

Case18

「ん…。」
「おはよう、唯。」
「あれ？僕…。」
七海はポットからお茶を淹れている所だ。
「あなた、良く眠っていたわよ？『お姫様のナイト』さん？」
僕は、すっかり眠っていたようだ。
「ああ、そうみたい。ずっと、起きているつもりだったのに。」
僕は、目をこすりながら言う。
なんだろう、昨日の夜は、なぜか大丈夫だ、という安心感があった。

「今、何時？」
この部屋には、時計が無い。
「9時よ。朝ご飯、ゆかりさんが貰ってきてくれたわ。」
テーブルに2人分のパンとお惣菜が置いてある。
「今、ちょうどポットのお湯も沸いたし、お茶淹れたから朝ご飯にしましょ？」
「うん…。」
僕は立ちあがり、テーブルにつく。
「もう、歩いても平気なのか？」
僕は、七海に聞く。
「おおげさね？もう、全然平気。ほら、包帯も苦しいから、テープにしてもらったし。」
七海は首を見せる。
よかった、思ったより酷い傷じゃなさそうだ。
「帰りの電車、そろそろだっけ？」
僕は、帰りの分の新幹線のチケットの時刻を確認しようとする。
「あら、まだ帰らないわよ？」
「え？」
帰らない？
「だって、まだ『首吊り女』の取材、ほとんど、していないじゃない。」
「おまえ、まだそんな事言ってるのか？あんな目に会っておいて？」
僕は、ビックリした様子で言った。
「それに警察だって、今この付近を捜索してるし、犯人だってまだ捕まって無いんだぞ？」
僕は言った。
「だから？」
「『だから？』て、どう考えても、危険じゃんか。」
「それは、ここに来る前から、分かっていた事よ。」
「それは、そうだけど…。」

七海は引かない。
「あなたは、『お姫様を守るナイト』なんでしょ？」
「それは七海が勝手に付けただけだ。」
「じゃあ、唯は私を、守ってくれないの？」
「そうは、言ってない。七海が、危険だから言ってるんだ。」
「私は、大丈夫よ。」
「どうして？」
「唯が、居てくれるから。」
「そりゃ、いるけど。」
「何かあっても、必ず唯が、助けてくれるわ。」
「どうして、そんな事、言いきれるんだよ。」
「どうしても、よ。」
答えになって無いぞ、それじゃ…。
「それに、あなた、月野日先生からも頼まれてるんでしょ？今回の事。」
う…。あの時の話、聞かれてたのか…？
『だからこれ、あなた達に、解決してもらおうと思って。』
確かに、先生から『解決』を頼まれた。
しかも、『世界法律委員会』からの調査として…。
「どちらにしろ、このまま帰るわけには、いかないわよね？」
確かに…。
いや、月野日先生も事情を知っているから、電話して話せば…。
「先生には、もう、連絡してあるわ。」
七海が僕の思考を先回りした。
「『傷はもう大丈夫だから、必ずこの七不思議を解決して、帰ります。』て。」
「はあ…。」
僕は、大きな溜息をついて、降参した…。

１時間後、僕らは出発の準備を始めた。
僕は、ゆかりさんや、七海を見てくれた先生に挨拶をし、入口に向かう。
『何かあったら、すぐ連絡して？』
ゆかりさんは、携帯の番号とアドレスのメモを僕に渡し、言ってくれた。
『怪我しても、すぐに私が治してあげるんだから！』
ありがたい言葉だったが、もう怪我なんて、ごめんだ。
もう、七海には、絶対に怪我なんか、させない。
「唯、遅い！置いてくわよ？」
七海さんがお怒りだ。
僕らは、『首吊り女』が現れたという『ペンション』へ向かった…。

そのペンションは、ここから少し距離があったが、なにぶん山道なので、交通手段は徒歩くらいしかない。
今日も、昨日に引き続き、空には雲ひとつない快晴である。
僕らも、こんな目に会わなければ、ハイキングを心から楽しめる雰囲気に、なれたのかもしれない。
「うわ～！すっごい気持ち良い！ねえ、唯！あそこに、きれいな花咲いてる！」
「心から楽しんでる！？頭の切り替え早っ！？死にかけた人の言葉違う！？」
「失礼な事言わないで。私だって、ＰＴＡになるかもしれないじゃない。」
「それは『ＰＴＳＤ』だ！？おまえがＰＴＡになったら、教師がＰＴＳＤになっちまう！？」
ちなみにＰＴＳＤとは外傷後ストレス障害の事…。
「ＰＴＳだかＰＴＴだか知らないけど、そんなもの、私が全て燃やしつくすわ。」

「株価大暴落！？さらに特殊部隊が消滅でシンガポール大パニック！？」
ちなみにＰＴＳとは金融用語で、私設取引システムと呼ばれ、ＰＴＴとはシンガポールの特殊警察部隊の事を指すらしい…。
こんなのｗｉｋｉらねえと分かんねっ！てか何で七海はこんな用語を知ってる！？
「あなた、意外と博学じゃない。私の足元のアリにも及ばないけど。」
「持ち上げて、めりこます、その巧みな話術に感服！せめて『のアリ』だけでもとって！？」
「あなた、『ギャルゲー』好きだったわよね？でも万引きは、れっきとした犯罪よ？」
「『ノエル』ね！？うわ、古っ！？『せめてノエルだけでも盗って！？』て馬鹿っ！？」
「あの子って、どことなく私に、雰囲気似てるもんね。」
「やった事ある奴いた！？あの子はお前みたいな性悪エロ猟奇的ＤＱＮ女とは違う！」
「今、何か、言った？」
「いえ…何も…。」
七海がビーチでカップルを襲うジェイソンの仮面が取れた時の顔をしている…。
「ふう、それにしても、まだかしら？」
七海が話題を変えた。
僕は、もう一度地図を取り出し、確認する。
「うん、もうそろそろ着くと思うんだけど…。」
僕は、あたりを見回す。
この辺りは、もうほとんどけもの道のようになっている。
夏のシーズンには、このけもの道も、ある程度通りやすいようにボランティアの方たちが草刈りにくるらしいことは、ゆかりさんから聞いていたが、それ以外の時期は、そのまま放置されているので、

言葉通り、『けものくらいしか、通らなそうな道』と化していた。
森の中は、空の晴天とは違い、薄暗い、ひんやりとした空気が、あたりを覆っていた。
「いかにも、『出そう』て、雰囲気よね。」
「確かに、僕もそう思う。」
「大きい方が。」
「下の方ですか！？しかも大！？緊張感無っ！」
「何勘違いしてるのよ、変態。『大きい方の怪物が』て、意味よ。」
「誤解を招く言い方やめて！？明らかに罠仕掛けられてたじゃん！？」
「まあ、『あれ』が『大きい方の怪物』て、意味なんだけどね。」
「結局下じゃん！？罠張った意味ねぇ！」
「なによ、そんな感じの敵キャラが出てくるゲームが、あなたのパソコンにインストールされてたじゃない。」
「それ絶対Ｒ１８ゲーム！？そんなゲーム、僕のパソコンにはインストールされてねぇ！」
「あら、そんなに自身満々に言う、てことは『起動するときだけソフトを入れてインストールして終わったらアンインストールしての繰り返しでばれないように証拠隠滅を繰り返す、の術』を唱えているというわけね。」
「呪文長っ！？唱えている内に『へぶしっ！』てされちゃう！？」
「質問に答えなさい、エロゲマスター。」
「はいいつもそうしてます！なのでその呼び名だけはどうかご勘弁を！イエス、ユア、ハイネス！」
「よろしい。良く分かってきたじゃない、あなた。」
お褒めのお言葉ありがとうございます…。
くそ、七海の奴、あのゲームの事、どこで知ったんだ…？
以後、気を付けよう…。

その後も、ずいぶんとけもの道を歩き、もうそろそろくたびれた、と思った頃、目の前に広場が現れた。
「へえ、唯。ここが、キャンプ場みたいよ。」
七海が声を上げる。
そこには、テントが5，6個張れるくらいの、小さなキャンプ場になっていた。
この山には、こんな感じで、複数のキャンプ場が、まばらにあるらしい。
「七海、あれ！」
僕は、そのキャンプ場の少し奥を指差した。
そこには、比較的新しい、木製の『ペンション』が建っていた。

Ｃａｓｅ１９

そのペンションは、一見すると、どこかの金持ちの別荘のようにも見える、少し洒落た作りになっていた。
屋根裏部屋からは、外を見渡せる大きな窓があり、テラスにも、木製のテーブルと、椅子が４つ並んでいる。
ネットの掲示板を見て、カップルが利用しに来る、とは聞いていたが、家族連れで訪れても、十分なくらいの広さに感じ取れた。
僕らは、そのペンションに近づく。
と、七海が何かに気付く。
「やっぱり、『立ち入り禁止』になっているわね。」
見ると、『立ち入り禁止』の看板が立てられ、ペンションの周りは黄色いテープの様なもので、ぐるりと一周回されている。
「月野日先生の言っていた通りか。」
僕は、月野日先生の言葉を思い出した。
『それと、今現場は立ち入り禁止になってるから、学校側から市に、『調査申請書』も出さないとね。』
たしか、そんな事を言っていた。

すでに、学校からは市に『調査申請書』を提出し、許可をもらっているはずだ。
「七海、たしかもう、『許可』はもらってたハズだよな？」
僕は聞いた。
「ええ、これが鍵よ。」
七海は、バッグから鍵を取り出す。
たしか、このペンションには鍵ない、という事だったから、この鍵は警察が即席で取り付けた錠の鍵、ということだろう。
僕は七海から鍵を受け取り、ドアに近づく。
やはり、鎖付きの錠がドアノブと窓の冊子の部分に、頑丈に固定されている。
僕は錠を開け、ドアを開けた。

数十分後、僕らは室内の木製の椅子に腰かけた。
「別に、特別あやしい場所は無かったな？」
僕は、持って来ていた魔法瓶を取り出し、ホットレモネードを2つの紙コップに入れながら言った。
「ええ、そうね。そこまでばか広いペンションじゃないし、隠し部屋みたいなものも、無さそうだしね。」
七海は、僕の隣に座りながら言った。
「唯一、あやしいと言ったら、この『紐』くらいかしら。」
七海は、フロアの天井からぶら下がっているものを指差して言った。
「ああ、それ。月野日先生の話にあった、カップルが懐中電灯を括りつけようとした、て言う紐かな？」
僕は、七海にレモネードを手渡しながら言う。
「多分、そう。最初に『首吊り女』が出てきた場所よ。あら、おいしいわね、これ。」
七海は満足そうに、レモネードを飲む。
そりゃ、自家製だから、おいしいだろ。

「これからどうするんだ？あたりでも探索してみるか？」
僕は猫舌なので、冷めるまで、カップで手を温めながら言う。
「いや、ここで待機よ。」
「待機？」
「そう、待機。今、１４時過ぎだから、あと四時間。」
七海は、携帯の時計を確認しながら言う。
「四時間？なんでそんなに？」
四時間もここで、何してればいいんだろう…。
「『何か』起こるとしたら、たぶん『午後１８時頃』だと思う。」
七海は言う。
「１８時…。あっ！」
「そう、４人が『首を吊って死んだ』時間。」
七海は続ける。
「最初、カップルが『首吊り女』を目撃した時間も、証言から推測して、たぶんこのくらいの時間だと思うの。」
「『首吊り女』を目撃した、同じ時間に、４人とも『首吊り自殺』、て事か…。」
本当に、まるで『ホラー小説』に出てきそうな設定だな…。
「それが、偶然なのか故意なのか、もしくは、『その時間でなくてはならない理由』、なんてのも、あるのかもね？」
『その時間でなくてはならない理由』…。
まるで、僕の『具現化』能力の、発動条件みたいだな…。
『対象者』の『イメージ』でなくては『具現化』できない…。
「ま、ともあれ、四時間待ってみるしか、ないわね。」
「そうだな…。」
僕は、納得し、ようやく冷めたレモネードを口に運ぶ。
「Ｈでもする？」
「ブホゥワッ！？」
僕は、口と、鼻と、もしかしたら目からも、レモネードを勢いよく吐いてしまった。

「四時間あれば、充分よね？」
「げほっ！げほ、す…、するか！？そんなモンッ！！」
「なによ、あなた四時間では事足らないとでも言うの？どんなスローセックスよ、それ？」
「行為前提だし！？だから『しない』、て言ってんだよ！！」
まだ、鼻も目も、なんだかツンとする。
目からレモネードって出るんだ…。
「あなた、『前戯』も『しない』なんて、どんだけ獣人化してんの？」
「します！いや、しません！…なんだか混乱してきた！？」
「混乱に乗じて、オモチャまで持ち出すなんて…！」
「持ってきてねえしっ！？『懐中電灯』と『ロウソク』くらいじゃ、ボケ！！」
「そ…、そんなモノをプレイで使おうだなんて！心の準備出来てないわよ！」
「せんでいい、アホ！？あの日を『再現』するための道具でしょ！？」
「以前にもそんなプレイを！？『再現』だなんて、あなた、私が寝ている間に、何かしたわね？どおりで、あそこが…！」
「『再現』違い！？何もしてませんっ！『どうりで、あそこが…！』、て自分でいじり過ぎて、ちょっと痛いだけだろ！て、僕の馬鹿！？」
「く…、痛いとこを突くわね…！言い返せないわ…！」
「言い返して！？僕が悪かったから、お願いだから言い返して！？ホント！」
こんなくだらない会話が、この後四時間近くも続くなんて…。
どんな、耐久レースだよ…、コレ…。

「あれ、もう18時過ぎてるじゃない。」

「あきれて『首吊り女』出て来なかった！？物語終了！？」
なんて終わり方だ…！
作者さん、ごめんよ？こんな、僕らで…！
僕は、涙を流しながら、あさっての方向に向かい、敬礼した。（すいませんしたっ！）
「おい、そこのアホ。何やってるのよ。」
七海は、汚物でも見るかのような目をして、僕に言った。
「ほら、懐中電灯。」
七海は促す。
は…、まだ終了じゃない！？
僕は、急いで懐中電灯を取り出し、スイッチを入れた。
が、電気は付かない。
「あれ？ペンションに入る前に、点くか確認したのに…。」
「それで、いいのよ。」
七海は、さも、分かっていた、みたいな言い方をする。
「ほら、次は『ロウソク』でしょ？」
「あ、ああ…。」
七海に急かされ、マッチを取り出し、ロウソクに火を付ける。
七海は起き上がり、ロウソクを僕から奪い、フロアの中央にかざした。
「現れたわね、『首吊り女』。」
「！！」
『現れた』だって…！？
僕も、慌てて立ち上がり、七海がローソクをかざしている方向に身を向けた。
「あ…！？」
そこには首を吊った、髪の長い女性が、ぶら下がっていた…。
「唯、絶対に『あいつ』から目を逸らさないでね。」
七海は言う。

こいつ…、怖くないのか…？
七海は、鞄から何やら取り出す。
…これは…『パチンコ』？
次の瞬間、七海は『首吊り女』対し、『パチンコ』で狙いを定め、弾を発射した。
「あっ！」
瞬間、女は消えた。
「唯、うしろ！」
「へ？」
僕は後ろを振り向いた。
僕の『目』の前に『目』がある…。
『目』！？
「うんぎゃ～～～～～～！！！」
僕は、変な声を叫び、尻もちを突いてしまった。
『目』じゃなく『顔』だ！
あまりにも、近くに『顔』があったから『目』しか分からなかったんだ！
「くっ！」
七海は素早い動きで、女に向け、第二射を放つ。
が、女はまたすぐに消える。
なんだ…？
なんで『首を吊ってる』のに、こんなに早く動けるんだ？
「あ！今度は七海の後ろに…！」
言い終わるまえに、七海は後ろを見る事もなく、裏拳を繰り出す。
が、また女はすぐに消える。
「七海、お前、格闘技なんか出来…。」
目の前に『口』があった。
「おんぎょあ～～～～～～～～～！！！」
僕は、また尻もちを突く。
「唯！おしゃべりしない！」

七海は後回し蹴りを、僕のすぐ頭上に放つ。
が、また消える。
僕、まったく、役に立って無い？
「こいつ、たぶん、『瞬間移動』の能力者だわ！」
七海は、また現れた女に攻撃をしかけながら言う。
『瞬間移動』…！？『能力者』…！？
「く…、ちょろちょろと、うざったいわね…！」
七海は尚も、女に攻撃を仕掛けている。
七海って、格闘技を身に着けていたのか…。
いや、身につけているってレベルじゃないぞ、これ…。
「唯！ぼーっとしてないで、『あれ』やって！」
『あれ』？
…もしかして…？
七海は攻撃を休めずに言う。
「『顔の無い人』にお見舞いした『あれ』よ！」
やっぱり…！
七海は、僕の、『具現化能力』の事を言っている…！
「早く！」
僕は、七海に言われるまま、（すんなりと体が動きだしたのは七海の『命令』に対し、自動的に僕の体が動き出したのだろう）、『記号』と『風景』をイメージした。
「あっ！唯！危ない！」
目の前に、僕の頭よりも『大きな口』が開いていたが、今度の僕は、そんなもの気にもせず、『形』をイメージする。
「くらえ！」
次の瞬間、空間が割れた。
部屋の壁一面から『退魔師』の格好をした人達が１０人ほど現れ、なんだか白いフサフサしたものがついている棒を振りながら、ぶつぶつとお経のようなものを唱え、『首吊り女』を取り囲んだ。
「うわ…、すご…。」

それらを召喚した僕自身も、その光景に驚いて腰を抜かしている。
『首吊り女』は身動きが取れないらしく、この世とは思えないおぞましい顔で、ひたすら暴れている。
この、怖い顔で、あの口で、喰われるとこだったのか、僕…。
今になって、怖くなってきた…。
『退魔師』達は、徐々に『首吊り女』に近づき、お経の声を大きくしていく。
完全に『首吊り女』を取り囲んだ所で、あのフサフサ棒を一斉に女に突き立てた！
「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」
女は、おぞましい声をあたりに響かせ、消滅していく…。
「『失敗×た』『喰×損ねた』『勘違×』『こ×女』『能×』『移動』……。」
ん？なんか言ってるけどなんだ…？
『勘違い』…？
「…。」
なんだか、七海は黙っている。
どうした…？
次の瞬間、あたりは光に包まれ、『首吊り女』も『退魔師達』も消えて行った…。

「ふう、やったな。」
僕は、七海に向かい言った。
「…。」
「七海？」
「え？…ああ、ええ。そうね…。」
また、七海は、なんだかおかしい…。
『顔の無い人』の時も、こんな感じだったような…。
「あいつが言ってた事、気になるのか？」

僕は、思い切って聞いてみた。
「え？」
「『勘違い』とか『移動』とか言ってたように聞こえたけど…。」
「ええ、そうね…。」
七海は、何も答えない。
「なあ、七海？」
「ん？」
「もしも、もしもでいいんだ。」
「うん。」
「いつか、その『七海が抱えているもの』が何なのかは、僕には分からないけど…。」
僕は続ける。
「いつか、僕に話してもいい、て思う時が来たら、必ず僕は、七海の力になるから。」
「え？」
七海は驚く。
「今は、言えなくてもいい。前、七海が僕に言ってくれた事と、多分同じ意味だと思うし、多分同じ気持ちなんだと、思う。」
「うん…。」
「その時が来るまで、僕はいつまででも、待ってるから。」
「うん…。」
七海は、少し、泣いているようだった。
僕は、七海を軽く抱き寄せ、涙を拭いてあげ、その小さな唇にキスをした…。

⇒ｎｅｘｔ「ｃａｓｅ『結』」ｔｏ ｂｅ ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ｃａｓｅ『転』（後書き）

次で最後？改行作業、肩凝りすぎ！？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4506ba/

case『転』

2012年1月12日02時55分発行